元気のヒ・ケ・ツ
足立の商人・創人

【編集・発行】
足立区産業経済部産業振興課
「元気のヒ・ケ・ツ」製作チーム
【問い合わせ先】
足立区産業経済部産業振興課
3880－5865（直通）

2018年10月発行

柳原商栄会 統括会長　稲荷ずし松むら　店主　　立花　千里さん

今年80歳！昭和39年から、柳原の地で、「稲荷ずし、のり巻き」一筋、今でもお店に立って握り続けています。テレビに何度も取り上げられたり、有名人もわざわざ買いに訪れるという専門店「稲荷ずし松むら」 店主の立花千里さんに、元気のヒケツをうかがいました。

－お仕事を始めたきっかけは？－

実家は福島で炭切り（木炭を規格に合わせて切ること）の仕事をしていたんだ。9人兄弟の4番目で、小さい頃から親の手伝いは、たくさんしていたよ。

長男が跡を継ぐと思っていたから、中学生の頃は、外国航路の船乗りになりたかったんだけど、親にそんな危ないことはだめだと反対されてしまってね。

昭和29年、中学卒業と同時に南千住のすし屋に手が足りないからと呼ばれて奉公に出たんだ。寿司と聞いて「生（なま）寿司」だと思ったら、稲荷ずしだったんだよ。それから10年頑張って、昭和39年25歳の時に、独立させてもらって、この地に店を構えることになったんだよ。

－仕事をしていて嬉しかったことは何ですか－

若い頃は、無我夢中、朝5時から夜の11時頃まで休む間もなく働いた。青春はなかったね。

何が一番嬉しいか、って、お客さんが増えたことだな。

今が一番良いかな。いろいろなお客さんと交流ができて、気持ちが通じ合う、それが楽しいよ。

今は店の留守番が楽しみ、顔見知りは遊びにも誘ってくれるしね。

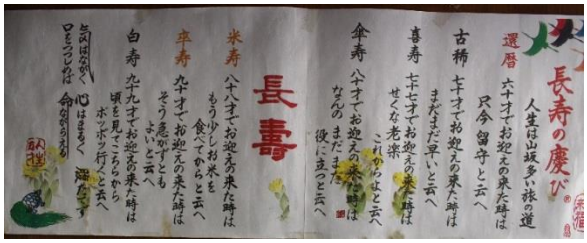
－お元気に、お仕事を続けていらっしゃるヒケツは何かありますか－

（店の奥ののれんを指して） あれだよ！（「人生成り行き」立川談志とあった）

暴飲暴食はしないことも気を付けてるね。

田舎暮らしだったから、通学は山道を毎日4km歩いたよ。親の手伝いもたくさんした。中学の頃は、60kgの荷物も背負ったね。その頃の身体づくりが、今の元気のもとになっているのかな。

手が綺麗だねってほめてくれる人もいるんだよ。毎日、油揚げを触っているおかげかな。



「八十八歳でお迎えが来たときは、もう少しお米を食べてからと言え・・っていうからまだまだだね」と。

－お仕事で大切にしていることは何ですか－

この仕事（稲荷ずし・のり巻き作り）は、下準備が大切なんだ。それをきちんとしておけば、お客さんを待たせず、手際よくできるからね。仕事は要領。

あと連携。一人でやることだけじゃないから、“気の効く”ことをすることが大事。イチイチ手を止めてやってたら、作れないよ。

出かけると、他の店ののり巻きを買って食べてみるけど、かんぴょうが1本しか入っていなかったものもあった。利益は欲しいけど、ケチな商いはしたくないね。ちゃんと、かんぴょうは柔らかすぎず、硬すぎずのものをしっかり入れる。そのための手間はかける。

職人は、作るのはうまいが、儲けが下手だね。自分は、なかなか商売人になりきれていないな、と思う。（笑）

「仕事は1つやれば、2つ・3つと見えてくる。」そう親に言われた。ありがたいね。その通りだよ。

その言葉のようにずっとやってきたよ。

３人がそれぞれがそれぞれの仕事を手際よく。

ご主人が巻いて奥様が切る、あうんの呼吸で次々に巻物が出来上がる。「お父さんは仕事には厳しいからね」と奥様。

刃釜で炊くお米は水分がちょうどよい。重いお米をあけて酢を混ぜるのは、娘婿の大さんの仕事。

－お仕事以外の楽しみはありますか？－

趣味はたくさんあるけど、1つもものになってないな。お客さんから誘われて、野球を見たり、落語や講談もよく聞きに行くよ。以前は、ゴルフにもよく行った。

今は、店の前を通る小さい子のために、店先にめだかを飼ったり、夏は朝顔を育てたりしてるよ。小さいお客さんがたまに寄ってくれるからね。

「稲荷ずし　松むら　千住店」

住　　所：足立区柳原2－23－6
営業時間：午前8時から午後8時
　　（火曜日定休）
電　　話：3881－1790

～編集者より～

現在、立花さんと奥様（ヨシ子さん）とお婿さん（小川　大さん）の三人でお店を切り盛りしている。

取材中（午前10時から正午）、お客さんがひっきりなし。立ちっぱなしで、次々に注文に応じながら、200個ほどのお稲荷さんと何十本もの海苔巻きを作り続けていた。こちらからのインタビューやお客さんとの会話に冗談を言いながらも手は止まらない、まさに職人技。食べると「ほろり」とほどけるようなご飯と、なんともいえない甘いお揚げとかんぴょうは、お客さんを思って朝早くから仕込んでいるからこそ作り出せる味わい。そして、立花さんにとって、お客さんとのコミュニケーションが何よりの元気のヒケツ。